『情湧き』

とある国のとある時代。今の私は、正確にそれを知ることができない。
悪魔である私がここに閉じ込められて、一体どれだけの時間が過ぎたのだろうか。
昔は身動きの取れない窮屈さに怒りを湧き上がらせていたが、今ではそれさえも億劫となり、ただ退屈に時間が過ぎるのを待つだけとなっている。
暗闇に包まれた視界。けれど次の瞬間、一瞬で目の前に眩しい白が広がった。なんだ、なにが起きた。
暗闇で過ごしていた私には、目に突き刺さってくるようなその白は、あまりにも痛々しかった。
そうか、これは光だ。長らく浴びることがなかったせいで、光がどんなものかすっかり忘れてしまっていた。
多少の時間をかけ、その光に慣れてきた視界にようやく映ったのは、幼い少女の姿。誰だ、この娘は。
娘は私の声を聴くと、驚いた表情を浮かべる。そして、恐る恐るといった様子でこちらへ近づき、花を閉じ込めたガラス細工を手に取ると、あろうことか笑みを浮かべて話しかけてきたのだ。
そのガラス細工は、私が封印されている器。この娘には、悪魔である私の声が聞こえている。ということは、やはりあの一族の娘で間違いないだろう。

ただひたすら欲望に忠実になるよう人を誑かしてきた私を、このガラス細工に封印した一族は、代々魔力を持つ者が生まれる家だった。
だが、魔力を持つと言っても、炎を出したり物を凍らせることができるわけではない。
予知夢を観ることができたり、透視をすることができたり、占いができたりと、そういった程度のものだ。
けれどその魔力のおかげで、この一族は繁栄を繰り返してきた。
そして一族の当主は、代々悪魔である私が封印された器を管理してきたのだ。

今までの当主達は私を厳重に管理してきたが、この娘は驚くほどに甘かった。
私が封印されている器を、長年眠らされていた蔵の中から持ち出し、悪魔である私に情をかけ、まるで人間のように扱おうとする。
なんと愚かなことか。この娘は私の話を聞かされていないのだろうか。
けれど、この娘の行動は、私にとってはとても都合が良かった。
封印されている今の状態では、完全な力は使えない。娘の魔力が弱まったその時、隙を突いて器から抜け出し、その身を喰らってやろう。
人間の子供は弱く脆い。病にでもかかれば、魔力が弱まるのなど簡単だ。
そんな悪魔の思惑などつゆ知らず、娘は私に怯えることなく無邪気に接し、私は娘を利用する為に優しく接して見せた。

それからの私は、来たる日までの暇つぶしとして、あの娘の人生を眺め始めた。
娘の両親は既に他界しており、まだ齢 14 にも関わらず、この家の当主として仕事をこなす姿は、まぁそれなりに立派だった。
「家を守る」それが亡き両親とした約束なのだと、齢 14 の少女にしては凛々しい顔をする娘は語る。
死んだ人間はこの世のことなどなにも覚えていないというのに。どこまでも愚かな娘だ。

更に、未だ齢 14 の娘は、泣くことをしなかった。
日々当主として仕事に追われ、難しい内容に首を捻り、自身の力不足に顔を曇らせる。
けれど、娘は決して泣くこともなければ、弱音を吐くこともしなかった。いつだって前を向き、下を見ることがなかった。
記憶など持たない死者との約束くらいで、この娘はここまでできるのか。人間とはわからな

い。いや、この娘が異例なのか。
　そんな齢 14 の娘が、人間の大人と同じ量、同じ質の仕事を抱えて駆け回っていれば、ガタがくるのはあっという間だ。
　ベッドで横たわり熱に魘されながらも、あろうことか娘は仕事をしようとしていた。
　以前から周りの使用人達に休息を促されていたのに、何故笑顔で首を横に振っていたんだ。体に異変があったのには気づいていただろうに。
　本当に、一体どこまで愚かなんだ、この娘は。

　結局、娘の容体が回復するまで、私が器から出ることも、彼女を喰らうこともなかった。

　数年経つと、少女は大人の女性となり、今では立派に当主の仕事を全うしている。
　当主として日々仕事に追われているのは変わらないが、難しい内容に首を捻り、自身の力不足に顔を曇らせることはもうない。
　休息も覚え、最近では仕事のし過ぎで倒れるということもなくなった。
　そして大人の女性となった娘は、婿入りしてきた男と結婚し、その男との間に子供を作り、とうとう母親になった。
　けれどあろうことか、娘は自分が仕事をしている間は私に子守を押し付けるようになった。子守と言っても、封印されている私ができるのは赤ん坊の様子を見守ることくらいだ。だとしても、悪魔である私に子守をさせるなんて、一体何を考えているんだこの娘は。
　文句を垂れれば「いいじゃない。暇なんだから」と娘は笑い、まるでそれにつられるかのように、揺り籠の中の赤ん坊も笑った。
　言葉通りの穏やかな日常。けれど、そんな日常は長く続かなかった。

　ある時から、世間にとある噂が流れ始めた。

「あの一族は邪悪な魔力を持ち、人に危害を及ぼす」

　一体誰が言い出したのか。一族を敵視した者の風評か、あるいは魔力を恐れる派閥の人間の仕業か。実際はわからない。
　けれど、小さな噂は人を伝染し、尾鰭を付け、更に大きくなっていく。

「心に干渉し、自分達に都合のいいように人間を操る」
「魔力で人を誑かし、財を得て一族は繁栄した」
「あの一族の当主は人間を喰らっている」
「彼らは魔力で人の命を奪う」
「この国を乗っ取ろうと裏で画策している」

　根も葉もない噂は、多くの人間に広まれば『真実』として扱われる。

　一族の者が持つ魔力は、人を傷つけられるような壮大なものではない。
　その魔力のおかげで繁栄を繰り返してきたのは事実だが、決してそれだけな訳がない。
　家と家族を守ろうとする彼らの強い意志、そして仕事や周りの人間に対する真面目さと誠実さ。彼らが代々受け継いできた、その志あってこそのもの。
　前当主だった娘の父親も、そしてその前の当主も、ずっと前から、この家はそうして守られてきたのだろう。
　それは、幼い頃からあの娘を見てきた私だからわかることだった。
　魔力があるというだけで、ここまでできるものか。その魔力を使う人間次第で、使い道も結果も変わるのだ。
　一族の者達は、一度たりとも魔力を悪用したことなどなかったというのに。

いつしか当主である娘は『魔女』と呼ばれるようになり、一族の魔力を危険視した者達により『魔女狩り』が始まってしまった。

空を劈くほどの悲痛な鳴き声が森に響く。
ざわめく森の木々の音と、遠くから微かに人々の怒号も聞こえてくる。
地面に置かれた私の目前には、血を流しながら泣き叫ぶ赤ん坊をあやす娘の姿があった。
娘達の家が襲撃され、婿養子の旦那は「自分が囮になる」と言いこの２人を逃がした。
娘は泣き叫ぶ赤ん坊と私を抱え必死に逃げたが、この森へと逃げる途中で追手に見つかり弾丸を撃ち込まれた。
崩れ落ちそうな体を引き摺り、どうにかここまで逃げてきたのだ。
けれど、もうこれ以上は無理だろう。この娘はもう逃げられない。追手の声もどんどん近づいてきている。
そんな最悪な状況だというのに、この娘はまだ微笑みながら赤ん坊をあやし続けている。
たまらず、私は叫んでいた。
「――おい！　私を解放しろ！」
突然叫んだ私に、娘は驚いた様子でこちらを見た。
「私なら、あいつらなんぞどうとでもしてやれる！　お前達を助けてやれる！　だから私を解放しろ！」
驚いた顔をしていた娘は、また小さく微笑むと、首を横に振った。
「何故だ！　何故！」
「駄目よ。それはいけないわ」
「なにがいけないんだ！　私を解放すれば、あいつらを全員殺して、お前達２人とも助けてやれるんだぞ?!」
「人を殺すことは、よくないことだもの」
「なにがよくないんだ！　あいつらだってお前達を殺そうとしてるじゃないか！　お前の旦那だって、もう殺されてるに決まってる！」
「それでも、駄目よ」
娘は頑なに首を横に振り続けた。
「何故だ……わからない……こんな目に遭っているのに、何故あいつらを殺してはいけないんだ……！」
「……貴方には、そんなことしてほしくない」
「……は？　なにを」
「人を殺すことはいけないこと。貴方に、そんないけないことを平気でするあの人達と、同じようなことをしてほしくない」
「同じもなにもあるかッ！　私は悪魔だぞ！」
「そうね……でも、私がしてほしくないの」
「ッ……！」
娘は小さく笑うと、抱いていた赤ん坊を私の傍に置いた。
「貴方には……この子を守ってほしいの」
「え……？」
「この子を守って、どうか大人になるまで、見守ってあげてほしい」
「なにを言ってるんだ……私は悪魔だぞ?!　子育てなんてできるものか！　母親であるお前が自分でしろ！」
「悪魔だけど……貴方は優しい悪魔だもの。貴方になら……任せられる」

――バァァンッ!!

大きな銃声が鳴る。奴らがすぐそばまで来ている。
だというのに、この娘は怯えもせずに私を見続けている。
「おいッ！　早くこの子を連れて逃げろ！」

「……幼い頃から私の傍にいてくれてありがとう」
　足音が、近づいてくる。
「貴方のおかげで、私は寂しくなかった」
　怒号が、大きくなる。
「ずっと見守っててくれてありがとう」
　こちらに走ってくる、奴らの姿が見えた。
「あとはお願いね」
　銃口が、娘に向けられた。

「やめろおぉぉぉぉぉぉツツツツ！！！！！！！！！！」

　銃声が天高く響くと、目の前の体が傾き、地面へと横たわった。
　その瞬間、周りから歓喜の声が湧く。喜びの声と、笑い声が交差する。
「おぃ……おい、起きろ……」
　倒れた体からは、なんの反応もない。
「おいっ……おい、頼むッ……起きてくれ……！　なぁ……！　起きてくれよッ！」
　どれだけ呼んでも、叫んでも、その体は微塵の反応も示さない。
　必死に叫び続けていると、娘の傍に数人の男達が寄ってくる。なんだ、なんなんだよ。
　するとその男達は娘の体を蹴り、銃で突き出す。
「お前達……なにをしている……」
　悪魔である私の声は、魔力を持たないこいつらには聞こえない。
　私の隣にいる赤ん坊は、未だ泣き続けている。
　男達は頷き合うと、力の入っていない娘をこの場から運び出そうとぞんざいに扱い始めた。
　触るな。触るな。触るな触るな。私の。私の大切な子に……！

「私の娘に触るなあああああ‼‼‼‼‼」

　私の叫びと共に、赤ん坊の泣き声が更に大きく響く。
　そして、崩れるような大きな音を立て、森に雷が落ちた。

　次に目を開けると、周りの木々は炎を纏い、大きく燃え上がっていた。
　地面には人間達が横たわっているが、全員息はあるようだ。
　もう一度雷を落としてやろうかと思い立ち、そしてすぐにやめた。あの子の意思に、背きたくはない。
　私は視線を自身の腕の中へ移すと、先程まで大泣きしていた赤ん坊がすやすやと寝息を立てて眠っている。
「……私を解放するとは、赤ん坊とはいえ、お前もあの一族の人間だな」
　久しぶりに人の形をしたが、黒い長髪の女の姿。やはりこの姿が一番しっくりくる。
　閉じ込められていたせいか、体は鉛のように重く感じた。早く感覚を取り戻さなければ。
　眠る赤ん坊から、轟轟と音を立てて燃える森へと視線を移す。
　久しぶりに器の外に出れたというのに、気分は晴れやかとは真逆だ。けれど、そんなことを嘆いている場合ではない。
　さて、まずはなにからするべきか。ひとまずこの国からは出た方がいいな。この赤ん坊をどうにか大人にしてやらなければ。
　面倒ではある。が、まぁ、無限にある時間の退屈しのぎにはなるだろう。それに、器に閉じ込められるよりよっぽどマシだ。
　さて、さっさとこの国を出よう。と、その前に。
「お前の両親の墓を作ってやらないとな」
　赤い血溜りの中で横たわる娘に近づき、しゃがみ込む。
「安心しろ。きちんと旦那の隣に寝かせてやる。だから……」

　撃たれて死んだわりには、随分と穏やかな顔をしているその子に手を伸ばし、慣れない手つきで頭を撫でてやる。
「安心して眠れ。愛しい子――」